

「食」のプロジェクト

「追大ミツバチプロジェクト」2018年度の活動報告

所員 今 堀 洋 子
(地域創造学部准教授)

1. はじめに

今年度のミツバチプロジェクトは、ニホンミツバチを一群確保し、その一群を日々観察しながら見守っていた。このニホンミツバチは4月にキャンパス近くの安威小学校の桜の木の枝に分蜂群が固まりでいるという情報を得て、捕獲してきた群である。夏の時期に、オオスズメバチにやられることもなく、11月まで活動を続けていた。残念ながら、12月に入って群が消滅してしまい冬を越すことができなかったが、一升瓶3本程度の蜜は採蜜できそうである。更に今年度は、茨木市市政70周年を記念して、茨木市主催で開催された、未来茨木市2018の政策コンテストに、ミツバチプロジェクトのメンバーや関心を寄せる学生で編成されたチームで応募し、「ミツバチでまちづくり」について政策提言も行った。それに加えて、11月に開催された万博でのロハスフェスタで、「蜜ロウでキャンドルづくり」というワークショップを開催した。以下、その内容について報告する。

2. 「蜜ロウでキャンドルづくり」のワークショップ

万博記念公園で年に数回開催されているロハスフェスタは、長年開催されているイベントで、多い時には数万人の来場者が訪れる人気のイベントである。そのロハスフェスタに、毎年ブース出展をしている彩都建設推進協議会からの誘いで、ミツバチに関する半日ワークショップを開催する運びとなった。ワークショップの内容として、ニホンミツバチの蜜ロウを使ってキャンドルづくりをすることにした。

参加者には、ミツバチの巣から微量に含まれている蜜ロウを取り出すことからしてもらいたかったが、時間の制約もあり、蜜ロウは、伏見のミツバチ愛好家の田中正志さんから分けていただいた。そして、その蜜ロウを溶かして、型に流し込み、麻ヒモを芯にしてキャンドルをつくった。その作業に入る前に、絵本や紙芝居を使って、ミツバチについて紹介する機会も設けた。ワークショップのチラシは、図1の通りである。また、当日のワークショップの様子は、図2に示す通りである。

参加者は50名程度で、うち14名の保護者の方にはアンケートに答えていただいた。結果は、ミツバチに関心が持てた、ハチの巣を実際に見えて良かった」など、概ね好評であった。ワークショップのスタッフとして地域創造実践演習の有志の学生8名(3回生5名, 2回生1名, 1回生2名)が参加してくれた。以下、参加した学生の感想である。

- 今日、私たちは蜜ロウでキャンドル作りのワークショップを行った。まず、初めに先輩方がその方法を教えてくださった。やり方がとても難しく、心の優しい先輩方が教えてくださったので、大成功した。私は小さい頃から蜂が苦手だったが、先生のおかげで好きになったのである。私は春の講義(環境の科学)で、最後の講義の時に生き物の気持ちになってお面をかぶりながら話した。そこで私は、蜂を選び蜂の気持ちを考えてみた。そこから、私は蜂が怖いと言うイメージを持っていたが、段々と慣れてきたのである。そして今では、未来茨木(30年後の茨木市)という政策でニホンミツバチを題材としたことを行っている。だから、ハチは恐ろしいが、何も抵抗をしなかったら襲ってこないということを学習した。これからもその体験を今後活かせたいと思う。そして、このロハスフェスタを通じて、たくさんの仲間の絆が生まれた。そしてさらに、子供たちの笑顔を見られて、とても幸せな時間を過ごせたと思う。
- 初めてミツロウでろうそくを作り、ミツロウを溶かすのが結構大変でした。でも、子供達に喜んでもらえて嬉しかったし、やりがいがあったと思いました。そしてもっとミツバチについて興味を持ったのでまた様々

なイベントに参加したいです。今日はありがとうございました！
 このように感想からも、参加した学生達も楽しんでた様子がうかがえる。

3. おわりに

「蜜ロウでキャンドルづくり」のワークショップは、ミツバチプロジェクトとしても初めての試みであった。ロハスフェスタということもあり、蜜ロウ、ミツバチ、ろうそくに関心を持ってくれる人達が多くいた。ワークショップを通じて、ミツバチについて知ってもらう良い機会ともなった。彩都建設推進協議会からは、ロハスフェスタに限らず、彩都西公園の管理棟でも、ロハスフェスタと同じようなイベントを開催しているので、そこでもワークショップをやってほしいとの申し出もあったので、来年度も継続して活動が続けていきたい。



図1 「蜜ロウでキャンドルづくり」ワークショップのちらし



図2 「蜜ロウでキャンドルづくり」のワークショップの様子